

「善導教学と證空」

高城 宏明 [京都西山短期大学]

中国唐代初期の善導（613～681）が説いた浄土教は、日本の法然（1133～1212）を始めその門下の浄土教に多大な影響を与えた。とりわけ法然はその著『選択本願念仏集』において「偏依善導一師」と仰ぎ、善導の『観経散善義』に示された「一心専念弥陀名号・・・」の文によって専修念仏を唱導したが、その法然に師事した證空（1177～1247）は、師の提唱した念仏を継承すると共に、独自の理解をして善導の著作「五部九卷」を注釈する『自筆御鈔』など多くの著作を残している。證空の著作はこの『自筆御鈔』等の教相と『当麻曼荼羅注』等事相教旨を説く著作に分けられる。中でも『玄義分自筆御鈔』を始めとした『観経疏自筆御鈔』の基となった『観経疏』すなわち「四帖疏」については、居室の四方壁面にこれを貼り付け理解を深めたと伝えら、さらに『当麻曼荼羅注』においては「当麻曼荼羅」を善導の『観経疏』に基づくものとするなど、師の法然に同じく善導の教学に深く傾倒していたものと思われる。

證空はその教学において浄土三部経中、とりわけ『観無量寿経』を重視する。善導が『観経玄義分』釈名門において、「言観者照也。常以浄信心手以持智恵之輝。照彼弥陀正依等事。」と言い、また、同和会経論相違門において『観経』散善顕行縁を引用し「第一如観経云。仏告韋提。我今爲汝広説衆譬。亦令未來世一切凡夫欲修浄業者得生西方極樂国土者。是其一証也。」として、以前の諸師とは異なる、独自の『観経』理解をしたことを承けて、『観経疏自筆御鈔』において、證空独自の『観経』十六観に対する理解を示すと共に念仏観を説いている。

また、證空は『観経疏自筆御鈔』を始め他の著作の中で、少なからず「譬喩」を取り入れている。「譬喩」とはある事柄を他の似かよった事物を用いて説明することであり、難解な語句や論理を分かり易い例示によりそれを見聞きした人に理解させる目的で用いられる。世間一般に用いられてきた慣用句的なものもあれば、諸文化専門的なものなど内容はさまざまである。諸経典や浄土教その他諸宗の祖師の著作にも譬喩が用いられているから決して證空に限った事ではないのであるが、證空は『観経』散善顕行縁の「広説衆譬」を受けて『観経』一部を譬喩経とし、正宗分の十六観は『無量寿経』所説の阿弥陀仏の本願、弘願による一切衆生の救済を顕わす釈迦の観門とする。すなわち、凡夫である衆生に必要なことは、一切衆生の往生が弥陀正覚に成就されていると気付くことであり、このために釈迦は異方便による『観経』十六観を施設されたと説くのであるが、證空が独自の称名念仏を説くにあたり、「譬喩」を取り入れるなど、自身の説く教義を理解させるためにいかなる工夫をし、また、何故にそのような説き方をしたのかについて考えることにする。

キーワード：観経十六観、観経疏、譬喩